

暖地向き飼料用水稻新品種「ニシアオバ」の育成

○田村克徳・岡本正弘・梶 亮太・溝淵律子¹⁾・平林秀介¹⁾・八木忠之¹⁾・

山下 浩・西山 壽⁴⁾・本村弘美¹⁾・滝田 正¹⁾・齋藤 薫¹⁾

(九州沖縄農研¹⁾・農研機構本部²⁾・作物研³⁾・元中央農研⁴⁾・元九州農試⁵⁾・種苗管理セ)

九州沖縄農業研究センターでは中生のホールクロップサイレージ用水稻新品種「ニシアオバ」を育成した。本品種は、2004年に大分県で飼料作物として奨励品種に採用された。そこで本品種の育成経過および主要特性について報告する。

1. 育成経過

「ニシアオバ」は長大粒・多収品種の育成を目標に、1986年に「北陸130号」(後の「オオチカラ」)を母として、SLG9 (後の「西海187号」, 「ひとはな」) を父として人工交配を行った組合せから育成された。同年冬にF₁を世代促進し、1987年にF₁で個体選抜を行った。1988年より系統育種法により固定を図ってきた。1990年より「は系大29」の名で生産力検定試験, 特性検定試験に供試し、1992年より「西海204号」の地方番号名を付し奨励品種決定調査に供試した。しかし、大粒種としての活用場面がなかったことから、1994年からは育成を中断した。2000年より飼料イネとして育成を再開し、ホールクロップサイレージ用としての特性を評価してきた。

2. 特性の概要

1) 形態的特性

「ニシホマレ」と比較して、稈長は約12cm長く、穂数は少ない(表1)。草型は“穂重型”である。短芒を有し、脱粒性は“難”である。玄米の粒形は“やや細長”で、粒大は“極大”である。

2) 生態的特性

出穂期は「ニシホマレ」より2日程度早く、成熟期は2日程度遅い(表1)。耐倒伏性は“中”で倒伏には「ニシホマレ」より弱い。黄熟期収穫の全乾物重は「ニシホマレ」より15%程度多く、育成地での早植えでは190kg/a以上の乾物収量を示す(表1)。いもち病抵抗性遺伝子*Pia*, *Pik-m*

を持つと推定され、葉いもち圃場抵抗性, 穂いもち圃場抵抗性とも“中”である。白葉枯病抵抗性は“やや弱”である。穂発芽性は「ニシホマレ」より発芽しやすい“易”で、翌年の漏生の危険が少ない。

3) 品質, 食味, 飼料特性

玄米の外観品質は“下上”で不良である(表1)。食味は“中下”で、日本晴より明らかに劣り、主食用には適さない。推定TDN含量は「ニシホマレ」と同等で、推定TDN収量は「ニシホマレ」より約15%多い(表1)。サイレージの発酵品質は良~可で、牛の嗜好性もよい。

3. 栽培上の留意点

1) 耐倒伏性は強くないので極端な多窒素栽培は避ける。

2) いもち病に対しては真性抵抗性遺伝子を持ち、現在の九州地域の優占レースでは、いもち病発生の可能性は小さい。しかし、圃場抵抗性は強くないため、侵害菌の発生動向に注意する。

3) 千粒重が重いので、播種量を多めにする。

4. 「ニシアオバ」育成の意義

九州地域で飼料イネとして広く栽培されている「モーれつ」は多収ではあるが、子実が脱粒しやすく、こぼれた種子が翌年漏生しやすい欠点がある。「ニシアオバ」は地上部乾物重やTDN収量は一般品種よりも10%以上多いうえに、難脱粒性で収穫・調製時のロスが少ない、穂発芽性が易で漏生稲の問題が少ない、極大粒で主食用品種との識別性があるなど、ホールクロップサイレージ用イネとして総合的な特性が優れている。本品種の普及が、九州地域における飼料生産に貢献するとともに水田の有効利用につながることを期待される。

表1. 「ニシアオバ」の品種特性(育成地: 2001~2003年、早植え極多肥(1.8kgN/a))

品種名	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	全乾物重 (kg/a)	玄米千粒重 (g)	耐倒伏性	TDN 含量(%)	TDN 収量(kg/a)	穂発芽性	玄米品質
ニシアオバ	8.19	9.28	105	21.9	352	197(115)	29.3	中	59.3	117(115)	易	下上
ニシホマレ	8.21	9.26	93	21.1	405	172(100)	21.1	やや強	59.1	101(100)	やや易	上下

注) TDNは、畜産草地研究所の推定式で推定。()内の数字は基準品種(ニシホマレ)に対する比率%(TDN=16.651+1.495×(OCC+0a)-0.012×OCC+0a)2)